

消防団員・消防職員の殉職事例 (消防庁及び全国消防長会資料より)



避難場所の公会堂で一人暮らしの移動困難な高齢者がいないのに気づき、他の団員1名とともに高齢者宅に救出に向かい、救出活動を行っていたところ津波に巻き込まれ高齢者とともに団員2名が殉職した。
(福島県南相馬市)



水門閉鎖後、屯所に戻り避難誘導に向かう準備中に、ポンプ車の無線から津波が押し寄せているとの情報が入った。非常事態を住民に知らせるためサイレンを鳴らそうとしたが、停電で作動しなかった。とっさに倉庫から半鐘を持ち出し、屯所屋上でそれを鳴らし続け、津波に巻き込まれ殉職した。(岩手県大槌町)



職場から居住地の水門の確認に向かうと、近くに住む高齢者が水門を閉めていたため、その高齢者に避難を指示し、代わって水門を開ける作業を行っていたとき、津波に巻き込まれ殉職した。(宮城県石巻市)



津波が水門を超えたとの情報により庁舎外に出ると、津波が押し寄せつつあったため、行き交う車両と住民を職員5名で東西の高台に避難させていたところ、瓦礫とともに津波が押し寄せ殉職した。
(宮城県南三陸町)



消防署内で現場指揮要員として活動中、第1波の津波の来襲により、屋上の無線アンテナ上に避難したが、第2波の津波により流されてきた船がアンテナに衝突し、屋内に残っていた1名を含む3名が殉職した。(宮城県女川町)

平成23年3月11日、甚大な被害をもたらした東日本大震災。消防団員、消防職員等は危険が迫るなか、水門閉鎖、避難誘導、救助、消火など懸命の活動をつづけ多数の住民の生命を救いました。しかし、その過程で228人というきわめて多くの殉職者が生じるという痛恨極まる事態となりました。

消防殉職者の遺児に対しては、小学校入学時～大学卒業まで財団法人消防育英会から育英奨学金をさしあげています。今回、多くの殉職者が生じてしまったことで、169人の遺児の方々が残されました。これまで107名だった育英奨学金の対象者が、2.5倍の人数に増えることとなり、大幅に財源が不足する状況となりました。残された遺児の健全な成長を願い、その就学を支援し、ご遺族を援助することは、大震災に立ち向かって懸命な活動をつづけ、殉職された消防団員、消防職員に報いるものでもであると存じます。なにとぞ趣旨をご理解いただき、消防育英会の東日本大震災消防殉職者遺児育英奨学金基金に対し、ご援助を賜りますようお願い申し上げます。

(財団法人消防育英会へのご寄付は税優遇措置の対象となります。)

(財)消防育英会
(財)日本消防協会
全国消防長会